

飛騨びと言の葉綴り

HIDA CITY 20TH
ANNIVERSARY



市制20周年を記念し、飛騨市観光プロモーション大使で、作家のオカダミノルさんと「のみながらにがおえ」でお馴染みの波岡孝治さんコンビによる飛騨市民の言葉を綴る連載企画を隔月でお届けします。

話すことも、歩くことも出来ない、重度心身障がい者の「萌ちゃん」！ だが、みんなの「心の依り代」となり、離れ離れに暮らす家族を紡ぐ

重度心身障がい者の、勝田萌ちゃん21歳。2003年4月19日、古川祭の日に河合町元田で、勝田家4人兄妹の末の次女として誕生。

「萌の時は、つわりがひどく、お腹の中に居る時も違和感があった。産声も上げないし、なんで？って」。

母である勝田なお子さん、咽返る萌ちゃんの背をさすり、当時を振り返った。

「小児科医は『様子を見ましょう』を繰り返すだけ。検査もなく不信感が募り、病名すら定まらず、受け止めきれなくて」。

生後一年を迎える頃。静岡てんかん・神経医療センターを紹介された。

「萌と同じような障がい児を持つ、お母さん方と出逢って！『内向きになっても、現状は変わらない！〈これからどうしよう〉に、時間を割いた方がいい』って」。

同じ境遇の子を持つ母の言葉には、医術を超える説得力があった。そして河合町へと一時帰宅。束の間ながら家族全員が顔を揃えた。だが無情にも、再び静岡の病院へ戻る日がやって来た。

「萌を静岡へ送って行こう！」。

誰が言い出したやら。途中、富士急ハイランドに立ち寄った。

「今思うと、後にも先にも一回きりの、親子水入らずの家族旅行やった」。

やがて萌ちゃんは、小学校へ入学。だが容態が急変すると、病院まで30分以上かかる救急搬送が、余儀なくされ負担となった。

「支援学校に通わせようと、古川で住まい探しをしとった時、ある方が『この家空いとるで使わん？』と」。

萌ちゃんが14歳の年に古川へ。様々な支援サービスも受けやすく、人の手が借り易くなった。

夫婦も子どもたちも、それぞれの事情で、一つ屋根の下から離れ離れに。だが勝田家全員の心は、これまで以上の太い絆で結ばれた。萌ちゃんを中心点に。

三步進んで二歩下がる日々。それでも萌ちゃんは大人への階段を登る。今年の成人の日。

「保育園の3年間、萌と一緒にだった子たちが、『萌ちゃん、一緒に写真撮ろう』って。萌も嬉しそうやった」。

保育園時代のたった3年。しかし同じ空気を共に吸い、同じ景色を眺め、同じ環境音に触れた友。それだけで「障がい者」と「健常者」の色分けもない、何一つ気負いのない「心のバリアフリー」が見事に体现された。

なおさんは今も二人三脚で、積極的に様々な活動に参加。

「萌の存在を通して、人やモノ、そして空間を結び付けられたら素敵やし」。

母は萌ちゃんの将来を模索し続ける。

もし萌ちゃんに言葉が宿ったら、どんな言葉を発するだろう？そんななおさんに問うた。

「いっぺんでいい。萌の口から『お母・・・』と言われたいなあ」。

萌ちゃんの足が上下に揺れ、突然ぼくの耳に萌ちゃんの声が舞い降りた。

『お母、わたしを産んでくれてありがとう』と。



古川町 勝田 萌さん
かつた もえ

広報ひだに掲載されている『飛騨びと言の葉綴り』は、紙面の制約もあり、ダイジェスト版です。市ホームページではフルバージョンやこれまでの連載もご覧いただけます。

